

者として敬意を表したい。

なお、上記のほか、第3・5・8・13章にはコラムも存在し、それぞれの分野における最近の動向などに関する平易な説明がなされ、関心を一層喚起させる。

一方で、2点ほど評者からの注文も記しておきたい。1点目は、編著者らもまえがきで触れていることではあるが、地理学からのアプローチの中に自然地理学者からの論考が存在しないことである。他分野からのアプローチには、生物学や土壌学、環境問題を主に扱う研究テーマが多いことを考えれば、これらの研究分野との関連性が人文地理学と同等以上に高いと思われる自然地理学者からのアプローチがやはり欲しかった。

2点目は、他分野からのアプローチを受けて、地理学がなしうることは何なのか、他分野と共通する問題の所在はいかなるものか、といった事柄について、最後の論点整理が欲しかった。他分野からのアプローチを読み進めるにつれ、それらの研究分野の魅力が次々と伝わってくると同時に、こうした研究諸分野に地理学はかくも多くの示唆や貢献を与えることができるのか、という驚きや高揚感を覚えずにはいられない。この熱が冷めないうちに、編著者によるもう一押しがあれば、本書から得られる知見は一層まとまったものになったように思える。尤もこれは、論点整理を読者自身が行ってこそ、という編著者らの期待や熱望によって、あえて記されていないのかもしれない。

いずれにせよ、評者によるこれらの注文は本書の価値をいささかも損なうものではない。むしろ本書で取り上げられた地理学研究の動向は、いずれも新鮮な内容であるがゆえに、論述に対する異なる視点の提示や詳細な意図を正したい地理学者も少なからず存在するかもしれない。しかし、専ら地理学のなかで本書を批評することは、本書の意図とは異なるし、本書が目指す高見を遠ざける

ことにすらなりかねない。むしろ、一人でも多くの他分野の研究者へ本書を紹介し、こうした研究者に地理学の存在を再確認してもらうこと、そして分野をまたいだ研究プロジェクトを1つでも多く作り出していくことこそが重要であろう。そして、この動きによって、編著者らの優れた能力が一層引き出されることが期待される。ぜひ一読をお勧めするだけでなく、読後は本書の存在を知らない地理学以外の方々にお声かけいただくところまでを切望する一冊である。

(淡野寧彦)

平岡昭利著：『アホウドリと「帝国」日本の拡大』
明石書店、2012年11月刊、279p., 6,000円(税別)

地理学のロマンとは何だろうか。中学校や高等学校の地理教科書や地図帳をながめていると、日本の領域が、国土面積に比して東西にも南北にも広がっていることに気づく。評者も小学生の時分、日本の領域を地図上で着色して、日本が予想以上に拡がりをもつ国であることに驚いたものだ。さらには大日本帝国の領域を現在の日本の領域と重ねたとき、日本(人)はどうして、これらの地域に進出(侵略というべきかもしれない)していったのか、不思議に思った記憶がつい先日のごとくのようによみがえる。鳥島の名称がアホウドリに由来することは認識していたが、最東端の南鳥島、最南端の沖ノ鳥島をはじめ、「鳥島」系の名称をもつ離島が数多くあることに疑問をさしはさむことはなかった。

評者がもし地理学のロマンを問われたならば、迷わず「探検」と答えるだろう。未知なる土地(テラ・インコグニタ)を求めて、海洋にあるいは内陸部へと探検を進めた人間の探究心、冒険心こそが地理学の原点にあるのだと思う。それはしばし

ば経済的な欲望に支配されたものではあるが…。

本書の魅力はまさに、地理学のロマンであり地理学の原点ともいえる未知なる土地への探究を詳細かつ実証的に描きだしたところにある。そしてその行動の背後にある人間の欲望を検証することに成功している。太平洋を南へ東へと乗り出し、新たなる無人島を獲得していった人々の行為により、近代における「帝国」日本の領土拡大が図られていったが、その背後にはアホウドリをはじめとする鳥類獲得による経済的利益への欲望があり、こうした「ゴールド・ラッシュ」ならぬ「バード・ラッシュ」が未知なる土地への探検の重要な動機として描き出されている。

本書は全体で4部から構成されている。簡単に内容紹介をしていこう。第I部では、明治以降の日本人による無人島探検から、「帝国」日本の領土拡大について論じたものである。アホウドリなどの鳥類捕獲が巨利をもたらす資源であると認識した人々による南洋進出について実証を試みたものである。

例えば、日本の最東端として知られる南鳥島は、明治期に日本人が広くアホウドリなどの鳥類を求めて、南洋の島々に展開するなかで、開拓・領有化が進められたものであり、さらには、島ばかりではなくグアノ（鳥糞）やリン鉱に着目する契機となり、南鳥島は日本で最初のリン鉱採掘の島となったことが指摘される。一方でいずれの資源も島の狭小性から枯渇が早く、さらなる資源を有する島を求めて南進を続ける人々の行動は空間的に拡大し、日本の領土を超えて南洋の島々へと向かったことが明らかにされた。

近隣諸国との領土をめぐる係争がメディアを賑わす昨今において、3章でとりあげられる尖閣諸島にかかわる論考はとくに興味深いだろう。ここでは尖閣諸島への日本人の進出について、沖縄県による調査（1885年）から1895年の日本の領有の

確定、その後の古賀新四郎の進出から古賀村の消滅までの展開が分析される。無数ともいえるアホウドリの群棲が注目され、日本の領有以前に多くの日本人がアホウドリおよびヤコウガイの採取を目的に渡航していたこと、アホウドリから始まった古賀による尖閣諸島での事業は、カツオ漁業と海産物、鳥糞の採取や農業、鳥類のはく製業と多角化が進められ、莫大な利益を上げたものの、大半の事業が資源略奪型の生産であり、かなりの資本投下により尖閣諸島に建設された古賀村も、30数年で消滅したことが明らかにされた。

このような無人島探検から日本の領土拡大の一端が、アホウドリ捕獲事業と密接に結びついていることが第1部では検証にされる。また1) 榎本武揚や志賀重昂ら南進論者の主張や冒険的な海洋小説の流行ともあいまって、南洋ブームの火付け役ともなったこと、2) こうした社会思潮に加えて、当時の地図や水路誌には数多くの疑存島が記載されており、アホウドリなどの鳥類捕獲が莫大な利益と結び付くことを認識した人々は、競って疑存島の探検に乗り出し、結果的に南鳥島の発見・領有につながったこと、3) 疑存島の「先願」あるいは「先占」が島の権利を生じさせることから権利獲得競争の一面をもっていたことが史資料をつぶさに検討することにより、実証的に示されている。こうした一攫千金をまくろむ山師的な人々の行動が、結果的に「帝国」日本の領域を東へ南へと拡大したことが明らかにされるのである。

こうした日本人による太平洋への進出は、「帝国」日本の領域を超えさらなる拡大を示していたことが第2部で論じられる。

明治期、鳥類を追った日本人の太平洋進出は、空間的にも拡大を続け、1897（明治30）年前後には遠く北西ハワイ諸島にまで達した。このような日本人の太平洋進出を著者は「バード・ラッシュ」と定義した。アホウドリの羽毛や鳥類のはく製

がヨーロッパで市場価値を有することが知られると、鳥の生息地である無人島獲得に血眼になった。鳥の宝庫であった北西ハワイ諸島には多くの日本人が進出し、危機感を持ったアメリカ合衆国政府は日本人の侵入を阻止するために、ルーズベルト大統領は20世紀初頭に鳥類捕獲禁止令を出し、ハワイ諸島鳥類保護地域を設定した。日本人のバード・ラッシュの背景には、日本政府による遠洋漁業奨励法をはじめとする多額の助成金があり、これらを利用して遠洋漁業よりも利益の大きい鳥類捕獲に人々が従事したこと、その結果多くの出稼ぎ労働者が組織的に南洋群島に派遣されたが、水や食料などの生活基盤に乏しい無人島では、ときに漂流者と同様の環境におかれ、生命の危険が高く多くの日本人が死亡したことがみえてくる。こうした事故・事件は鳥類捕獲が密漁の性格を帯びていたこともあり、伝承されることなく歴史のなかで忘却されつつあり、本書によって貴重な日本近代史の裏面が明らかにされたともいえる。

第3部では、アホウドリなどを追った日本人の行動は、鳥類の減少に伴い、さらなる島々を求め空間的にも拡大し、無人島獲得競争が激しさを増していく様態が明らかにされる。1885年に沖縄県の探検によって日本領となった南・北大東島、1900年に水谷新六らの探検によって領土化したラサ島（沖大東島）では開墾計画が作成され、農業労働者の移住が進められたが南大東島のサトウキビ栽培を除くと困難を極めた。無人島への進出目的は、1905年以降アホウドリなどの鳥類に加え、グアノ・リン鉱が加わり大きく転換する。ラサ島では激しい借地権獲得競争がなされたが、リン鉱資源が枯渇すると、新たな島々を目指す行動が繰り返され、1918年にはスプラトリー（南沙）諸島への進出がなされた。こうした無人島進出の動きは、次第に企業行動としての性格を帯びるよ

うになる。南北大東島は東洋製糖による独占資本のプランテーション経営のもと、サトウキビの生産が行われるが、労働者は小作農と規定され、以後大きな土地問題を抱え込むことになった。

このように太平洋の島々に拡大された日本人の行動は、1905年ころから次第にグアノ・リン鉱が主目的となっていく。第4部では、重量のあるこれらの採取・採掘は、多くの労働者や運搬に耐えるトロッコや大型汽船を必要とするものであり、必然的に企業的な資本投下がなされてきたこと、さらにリン鉱が軍事的に有用な資源となるにつれて、南洋諸島への武力進出に至ったことが論じられる。1895年には日清戦争の結果、台湾・澎湖列島が日本領土とされ、外地へと進出が進められる。一攫千金を狙った日本人による進出はさらに拍車がかかり、第4部では台湾島北部の無人島への借地申請や東沙（プラタス）島での企業島建設と領土化した問題について分析された。1914年の第一次世界大戦時には、海軍は南洋群島に進出するが、アンガウル島のリン鉱の重要性を認識していた海軍と大手商社などが結びつき南洋経営組合が設立され、同島のリン鉱採掘に着手した。その後同島のリン鉱採掘事業は高度な政治的判断により民間から海軍直営となったことなど、武力進出からリン鉱争奪の顛末が明らかにされた。

さて、本書のもつ豊富な内容の一端を紹介するだけで、与えられた紙幅を超えてしまった。評者の能力不足をお詫びするとともに、最後にコメントを付しておきたい。本書の魅力は何よりも、著者の発想・構想力に基づいた近代日本における地理的事実の実証的解明にある。アホウドリ捕獲を帝国日本の推進力とする「アホウドリ史観」のロマンはもちろん本書の魅力であるが、残念ながらアホウドリは本書の主役ではない。本書の魅力は著者の生涯を通しての疑問や仮説を、現地での聞きとりや観察を繰り返しながら、一つの物語を紡

いでいくこうした著者の地理学者としての態度そのものにあると言えるだろう。

本書「おわりに」に本書執筆の動機が示されている。南北大東島では、防風林の内側にドーナツ状に広がる土地条件の良い地域に専従の八丈島系島民が居住していた。八丈島の人々が、どうして南西にはるか離れた大東島に住んでいるのか、彼らはなぜ命がけでこの島の断崖をよじ登ったのか。また尖閣諸島や南鳥島など、人間の居住が不可能と思われる島々に、日本人はどうして進出したのか。40年来の疑問を原点にフィールドワークや文献を積み重ねながら、その解決をはかった本書は本当に充実した読後感を与えてくれる。フィールドワークの面白さとそれを裏打ちする文献史資料の説得性は、類書の追従を許さないであろう。

本書で分析の対象とされた島々は、少々オーバーな表現をお許しいただけるならば、太平洋上に浮かぶ絶海の孤島である。絶海の孤島という最も人類の居住から隔絶された離島と人類から隔絶

されているがゆえにアホウドリの楽園が築かれ、その結果人類の到達・収奪がもたらされた近代史の一面を本書は余すところなく伝えてくれる。周知のように著者は離島研究の第一人者として知られているが、本書はそのライフワークの成果として珠玉の「作品」ともいえるだろう。本書を手にとられる方は、世界地図もしくは地球儀を手元におきながら読まれるとよい。学術書・専門書であるが、わくわくしながら読み進めることができるだろう。願わくは本書を骨子とする普及書が著者の手によって出版されるならば、地理関係以外にも広く読まれることであろう。

(松井圭介)

文 献

- 平岡昭利ほか編(1997～2006)：『地図で読む百年 全10冊』古今書院。
 平岡昭利編著(2003～2010)：『離島研究 I～IV』海青社。
 平岡昭利編(2009)：『離島に吹く新しい風』海青社。